

「寄居の桜」と「寄居らしさ」

教頭 今井 岳

4月に入っても気温が低い日が続いていましたが、始業式を境に一気に季節が進んだようでした。寄居の桜も一気に花開き、例年通り見事な桜のアーチができあがりました。毎朝、そして帰宅するときそのアーチをくぐるたびに、ほっこり心がリラックスするようでした。花びらが散った後には、青々とした若葉のアーチ、そして秋には紅葉の真っ赤なアーチへと移り変わっていきます。

そのような私たちをいつも癒してくれる寄居の桜も、年々少しずつ変化をしています。約10年前に、私が教諭として寄居に勤務していた頃の校舎脇（自転車小屋のあたり）の桜は、枝振りが現在の2倍くらいあり、満開になる頃には本当に見事なアーチを見せてくれたものです。しかし、現在は少しずつ花を減らしています。また、生徒玄関前の桜はまもなくその寿命を迎えるようで、弱々しくなっています。その代わりに10数年前に植樹された道路脇の桜はまだ幹は細いですが順調に育ち花を咲かせてくれています。そして校門や歩道脇の桜は勢いよく枝を伸ばし、登校する生徒の皆さんを温かく出迎えてくれています。

寄居の見事な桜が少しずつ引き継がれていくのと同じように、寄居中生として先輩から後輩へ脈々と引き継がれているものがあります。おそらく3年生の皆さん1人1人には、先輩から引き継いだ「何か」を感じてくれているのではないのでしょうか。みんなが同じものを感じているかもしれませんが、違うものかもしれません。2年生でもそれを感じている人がいるかもしれません。でも、みんな無意識のうちに、寄居中生らしい立ち居振る舞いをするようになっていきます。

私が感じている、約10年前に教諭として勤務していた頃と比べて変わらない「寄居中生らしさ」をあげてみたいと思います。

○相手を温かくまるごと受け入れる姿勢

話し合い活動を行うために、まず相手を受け入れ、話を聞き、相手を傷つけることなく自分の意見を述べるのが大切です。

○リーダー（上級生）が率先してメンバー（下級生）を助けたり教えたりしようとする姿勢

行事などリーダーが率先して汗をかき、メンバーに丁寧に教え、粘り強く活動することで集団の絆を強くしていきます。

○リーダー（上級生）の丁寧な言葉遣い

指示を出すときの「○○してください」などのような丁寧な言葉遣いは、居心地のよい学級、学年、学校を作っていきます。

この3つはあくまで私自身が感じていることです。他の先生方や生徒の皆さんは、また違ったことを感じているかもしれません。そのどれもが「寄居中生らしさ」と言えると思います。是非皆さんも、日々の学校生活の中から「寄居中生らしさ」を探して見てください。そして、その伝統を引き継いでいきましょう。

校歌にも歌われているグランド脇のポプラ並木ですが、昨年度環境委員会が7本のポプラの苗木を植樹してくれました。まだ細く弱々しいポプラですが、数年後には立派なポプラ並木に育ってくれることでしょう。授業や部活動、学校行事など折に触れてポプラの成長を見守っていきたいと思います。

